

『かわまち大賞』 応募調書

令和4年9月27日作成

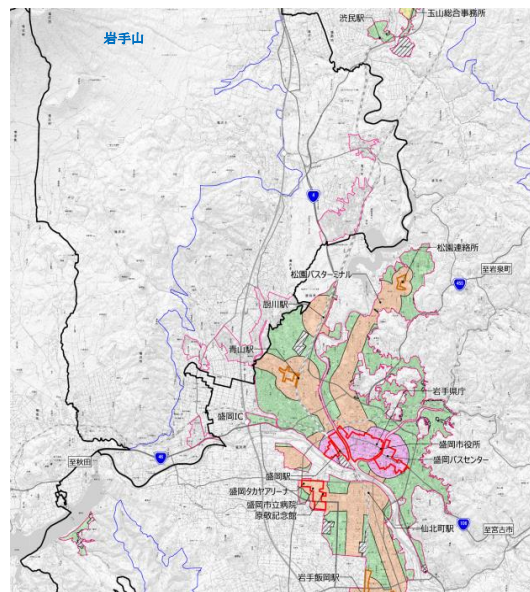
かわまちづくり名称	盛岡地区かわまちづくり
取組内容【題名】	住民参加の「かわ」の活用 ～観光客数も着実に増加～
河川名	【一級河川】北上川水系 北上川・中津川 (河川管理者:東北地方整備局 岩手河川国道事務所)
所在地	北上川:岩手県盛岡市神子田町・東仙北～材木町・盛岡駅前北通地先 中津川:岩手県盛岡市馬場町・大沢川原～浅岸
推進主体	盛岡地区かわまちづくり懇談会
構成員	学識経験者(岩手大学教授・准教授、岩手県立大学教授)、NPO 法人 いわて景観まちづくりセンター、盛岡商工会議所、盛岡青年会議所、NPO 法人もりおか中津川の会、岩手県自然保護協会、盛岡市、岩手河川国道事務所
代表者の役職、氏名	盛岡市長 谷藤裕明
担当者の役職、氏名	盛岡市都市整備部公園みどり課 計画係長 齊藤 和貴
連絡先	TEL:019-651-4111(内線)7266 E-Mail:kouen@city.morioka.iwate.jp
整備状況	完成供用済・部分完成部分供用

概要(写真や図表を添付し、わかりやすい資料づくりに努めてください。)

(1)市町村の特色

盛岡市は岩手県の中央部に位置しており、市内中心部を流れる北上川・中津川の合流点に位置した丘陵地を利用して、南部信直が慶長3年(1598年)に築城を開始した盛岡城を中心に栄えた城下町である。

市の北西部には「南部片富士」の愛称で親しまれる岩手山(標高2,038m、十和田八幡平国立公園)などの景勝地があり、その周辺には温泉、スキー場、小岩井農場などの観光地を有している。首都圏と盛岡を結ぶ東北新幹線では、東京から約130分、仙台から約40分という利便性の良さもあり、年間約500万人の観光客が訪れている。また、平成9年に秋田新幹線が開業、平成22年には東北新幹線が新青森まで全線開業、さらに平成28年3月には北海道新幹線の開業で新青森から新函館北斗までつながり、東北の交流拠点都市として発展している。盛岡市内には「わんこそば」、「盛岡冷麺」、「盛岡じゃじゃ麺」といった盛岡三大麺の店が約50店舗もあり、また越後丹波に並ぶ日本三大杜氏の一つで

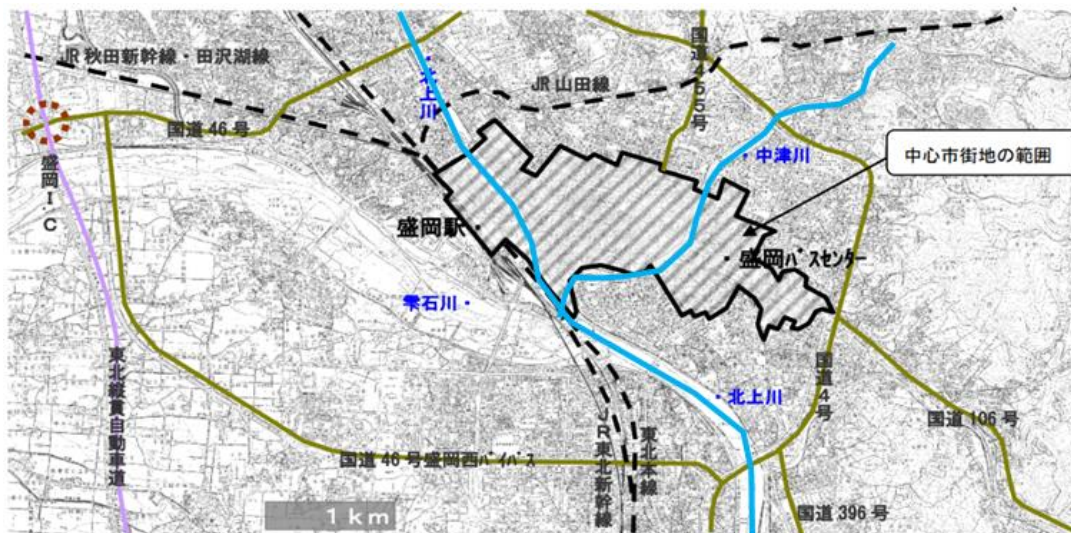


ある「南部杜氏」の里として「地酒」も人気があり、盛岡の味を目当てに多くの観光客が訪れている。

盛岡地区かわまちづくりで取り組んでいる「北上川」、「中津川」は、盛岡市の中心を流れる河川として小学校の校歌にも名称が出てくるなど、広く市民から親しまれており、憩いの場となっている。日頃より散策等に利用され、中の橋下流河川敷では、サケの放流会、伝統行事の「チャグチャグ馬コ」他、四季を問わずたくさんの行事やイベント、ボランティアによる清掃活動が開催され、多くの市民、観光客に利用されている。



望郷の岩手山、麗しの姫神山、鮭が遡る川、歩きたいまちなみ、鮮やかな四季が彩る城跡、盛岡には自然と暮らしの物語があります。



(2)かわまちづくりの内容

①まちづくりの課題と方針

盛岡市街地は北東北の玄関口として、年間 500 万人の観光客が訪れるが、郊外への大型商業施設の進出の影響等で、中心市街地の空洞化が進んでおり、中心市街地の活性化が急務となっている。

このため、良好な観光資源である北上川、中津川の河川空間を観光アクセスとしても活用することで、盛岡駅～中心市街地の観光資源を結び付け、盛岡市が進める中心市街地活性化事業（中心市街地活性化基本計画(平成 20 年 7 月 9 日認定)）などのまちづくり事業と連携した事業促進及び効果発現の面からも相乗効果が期待できる。

②北上川の取り組み

1) 概要

- 江戸～明治初期までは盛岡から江戸、仙台へ向けた舟運による交通・輸送により、交通結節点として沿川地域が発展し、現在では毎年約 1,000 艇が参加する「盛岡・北上川ゴムボート川下り大会」や「盛岡舟っこ流し」、「花火大会」に加え、中心市街地に流れる大河川（北上川）の特性や歴史的背景を踏まえ多くの人が北上川へ訪れる取り組みを行っている。特に北上川においては、流域沿川商店街などから舟運文化を復活

させようとする機運が活発になり、関係町内会など7団体で構成する「北上川に舟っこを運航する盛岡の会」（以下「舟っこの会」という。）が発足するなど、地元団体等から舟運復活に向けた活動が盛んになってきており、新たな観光資源として、観光振興や地域の活性化に大きな効果をもたらすと期待されている。

- まちなか観光ルートと連携させることにより、水辺空間を活かした重層的な周遊ルートの形成を図り、水辺空間へのアクセスの向上を図るため既設の河川管理施設を改良した階段整備や街並み景観と調和した石積護岸への改築を行っている。
- 盛岡駅前に隣接した木伏緑地では、Park-PFIの活用によりまちなかにこれまで存在しなかった、芝生広場というオープンスペースを整備し、北上川沿いの木伏緑地とその前面に位置する堤防敷と高水敷利用した河川空間を一体的に再整備し、日常的に市民が訪れる場となった。また、盛岡駅前エリア、大通りエリア、材木町エリアの各商店街をシームレスにつなぐ結節点となり、河川空間を利用したイベントが行われ、賑わいの創出と河川空間の利活用を同時に実現している。
- 対岸の河川堤防では、市民団体のボランティアより花壇が整備され、盛岡を訪れる観光客をもてなし、四季折々の川の情景を演出している。



盛岡駅前エリアと木伏緑地



開運橋花壇と北上川（木伏緑地の対岸）

2) 先進性

盛岡駅東口に位置し北上川沿いの木伏緑地では、民間資金を活用した新たな整備・管理手法「公募設置管理制度（Park-PFI）」を活用した施設が令和元年9月にオープンしている。公衆トイレや飲食店等などが整備され、同制度を活用した事業としては、東北地方初の取組みとなっている。日常的に、河川空間が市民の憩う場となったことに加え、河川敷での「街なかキャンプ」や河川空間の活用について河川利用者が焚火を囲んで意見交流を行う「焚火トーク」の開催、国土交通省が整備した船着き場を活用した舟運イベント「川開き」や「北上川フェスタ」と一体となったイベントに多くの市民が参加するなど「川が街の一部」となっている。



木伏緑地飲食店等の賑わい



木伏緑地3周年「焚火トーク」



舟運イベント（北上川・開運橋上流）
と連携した河川敷のキャンプイベント



盛岡駅前エリアイベントとの連携による
河川敷の YOSAKOI さんさイベント

3) 継続性

- ・木伏緑地は、地元企業による地域循環経済を目指し、地元資本によって設立されたゼロイチキュウ合同会社が整備・運営を行い、飲食店等のテナントも周辺の民間収益施設の賃貸価格相場を下回るような価格設定とし、地元資本が参入している。また、事業期間 20 年の協定を締結し、民間事業者との連携により、継続した賑わいの創出と市の維持管理費の財政負担軽減を図るなど、持続性の高い運営体制を構築している。
- ・舟運の運航は地域住民や商店街等で構成している「舟っこの会」が主体で進めるが、観光振興や河川空間の利活用の観点から市、国も含め地域全体により協働で取り組んでいる。
- ・地元舟っこの会では、平成 30 年に木造舟「もりおか丸」を自主製作し、本格運航に向けて取り組んでいる。最近の運航では、北上川の下流に合わせて整備された船着き場を活用し、下船後に盛岡町屋の保存を進める鉾屋町界隈のまち歩きへの誘導やリニューアルオープンするバスセンター付近と船着き場間を周遊する昭和レトロを体感できるボンネットバスと連携し「かわ」から「まち」へと誘導する取り組みも行われおり、将来的には河川空間のオープン化を見込み「かわ」と「まち」が連携した商業運航を実施し、地域住民等の主導による事業継続性の確保を目指している。

4) 創意工夫

- ・地元舟っこの会主体による舟運の取り組みや、民間事業者が計画しているカヌー・カヤック等のウオータースポーツを楽しむ拠点づくり構想を受け、国土交通省が木伏緑地前等の河川敷に降りる階段や船着き場を整備した。この整備にあたっては、舟運上の使い勝手だけでなく木伏緑地来園者の日常的な利用を考慮し、事業者等の意見を反映するなど、地元や民間事業者の「まちづくりの視点」を取り入れ、ベンチ兼用の階段や舟を下すスロープ付きの船着き場にするなど利用者の意見を反映したものとなっている。
- ・利用者の意見を取り入れた整備により、コロナ禍においても「水際の居場所」としての開放的な空間により多くの市民に日常的に親しまれている。
- ・舟運の運行について、「川面から陸を見るという非日常について感動と喜びを感じた」という感想が圧倒的に多く、乗船者のほとんどが今後も同様（舟下り）のイベントに参加したいという意見が多く寄せられている。また、社会教育関連の市民講座や観光キャンペーンと連携した乗船など、団体による予約で事前に乗船席が埋まることも多くあり、舟運事業の効果が表れて始めている。



ベンチ兼用階段の利用状況



船着き場の階段でくつろぐ市民

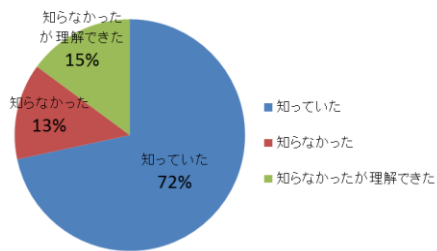


北上川下流(新山河岸)スロープ付きの船着き場(町家界限)

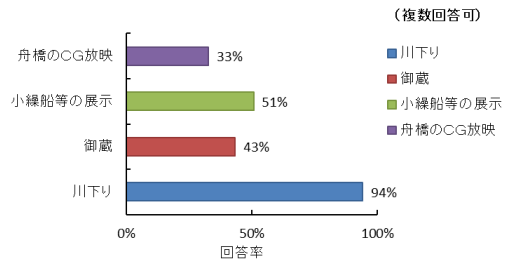


舟運と連携した運航するボンネットバス

かつて北上川で舟運が盛んだったことを



「舟運の歴史探訪舟下り体験」良かったもの



③中津川の取り組み

1) 概要

- ・盛岡城の西側を流れる北上川とともに、東側を流れる中津川は天然の要害として外堀の役割を果たし、古くには城下町の用水や薪材の輸送に利用され、アユ、ウナギ、ヤマメなどが豊富で、川漁も盛んであった。現在でも天然のサケが河口である石巻から200kmの距離を遡上することで有名であり、中の橋や上の橋からサケを見る市民の姿は、盛岡の秋の風物詩となっている。
- ・周辺には歴史的建造物や史跡が多く存在し、清らかな中津川の流れる「平成の名水百選」に選ばれるなど市民にも親しまれ、観光資源にもなっている。
- ・北上川と同様に、まちなか観光ルートと連携させることにより、水辺空間を活かした重層的な周遊ルートの形成を図り水辺空間へのアクセスの向上を図るため既設の河川管理施設を改良した階段整備や街並み景観と調和した石積護岸への改築を行っている。
- ・高水敷を修正し、水辺の自然環境、学習の場、散策の場など日常の身近で水辺に近付ける空間の整備を行っている。
- ・盛岡市では、もりおか町家物語館やもりおか歴史文化館など観光拠点施設の整備を行っている。



チャグチャグ馬コ（中津川・中の橋下流）



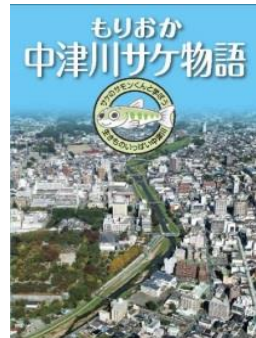
河川敷散策路の日常利用（中津川）

2) 先進性

- ・サケが遡上することで有名な盛岡は、地元町内会が中心となり、毎年春にサケの稚魚の放流を行っている。
- ・「サケを資源としたまちおこし」として、平成29年度にサケを紹介する冊子「もりおか中津川サケ物語」を1万部を作成し、中津川近隣の小学校や町内会、観光案内施設に配布し、川の自然を守り、共存する、まちの魅力を発信しており、環境教育の教材や観光資源に活用されている。令和2年度には内容を更新し、沿川小学校や観光施設等に配布している。



サケ稚魚放流会（中津川・中の橋下流）



もりおか中津川サケ物語

3) 継続性

- ・サケの稚魚の放流を地元町内会が中心となり、近隣の小学生も参加して、平成6年から毎年実施し令和4年3月で第28回となる。
- ・中津川の整備された河川敷の散策路を利用し、盛岡城跡公園を発着とする「いわて健康ウォーク」が地元企業の協賛により行われ、多くの市民が秋風を感じ健康づくりをしながら景色や会話を楽しんでいる。



いわて健康ウォーク(中津川散策路)



2020 いわて健康ウォーク
(北上川上流散策路)

4) 創意工夫

- ・盛岡の秋の風物詩となっているサケの遡上を知らせる、のぼり旗の「サケのぼり」が、地域住民や国・市等によるかわまち勉強会の発案で設置されており、市民や観光客が秋を感じる目印として定着しつつある。
- ・市役所裏の河川敷で開催した「水のほとりの上映会」は、河川敷がオープン・エアであることに着目し、コロナ禍における映画の街盛岡の新たな試みとして市民発意により開催された。この映画会をきっかけに、令和4年7月と9月に北上川木伏緑地でも上映会が開催され、令和4年10月には中津川河川敷での第2回目の上映会開催が予定されている。市内のNPOが主体となり、公園と河川の両方の公共空間を舞台にした上映会が継続的な取り組みになりつつある。



中津川沿いに設置したサケのぼり



水のほとり映画会（中の橋上流）

(3) 継続性

かわまちづくり計画の実現に向け、かわまちづくり懇談会、かわまち勉強会、かわまちづくり（舟運）実行委員会、ミズベリング検討会等、住民を含む組織が設立され、現在も活動を継続している。主な活動の歴史は下表のとおり。

盛岡市や地域住民及び民間事業者等による活動の歴史

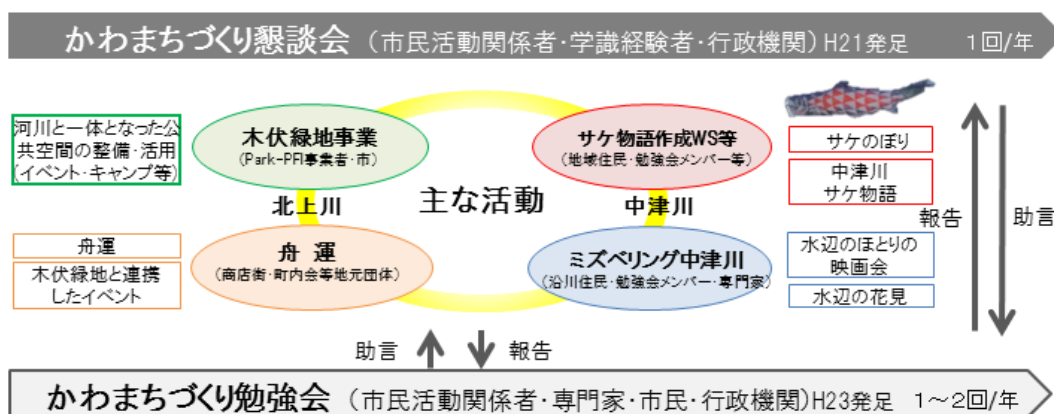
H21 年度	(かわまちづくり計画が H26 まで認定) かわまちづくり懇談会を発足し第 1 回～第 3 回を開催。
H22 年度	第 4 回～第 5 回かわまちづくり懇談会を開催。かわまちづくりワークショップを発足し、中津川で 3 回、北上川で 2 回開催。7 月 24 日～25 日、8 月 29 日にはオープンハウスを実施。
H23 年度	第 6 回～第 7 回かわまちづくり懇談会を開催。中津川、北上川合同でのかわまちづくりワークショップを 5 回開催。5 回目のワークショップで市民から挙げられた提案書は、第 7 回懇談会の議題となった。8 月 21 日にオープンハウスを企画。10 月 26 日には、準備会を経てかわまちづくり勉強会が発足。
H24 年度	第 8 回かわまちづくり懇談会を開催。第 2 回かわまちづくり勉強会を開催し、去年の第 7 回懇談会で議題となった市民からの提案書を反映するため、施策と協議した結果を議題とした。8 月 26 日にオープンハウスを実施。
H25 年度	(かわまちづくり計画を H29 までに変更) 第 9 回かわまちづくり懇談会、第 3 回～第 4 回かわまちづくり勉強会を開催。8 月 25 日にオープンハウスを実施。
H26 年度	第 10 回かわまちづくり懇談会、第 5 回かわまちづくり勉強会を開催。また、2 月 23 日にはミズベリング事務局講師によるミズベリング勉強会を開催。
H27 年度	第 6 回～第 7 回かわまちづくり勉強会を開催。
H28 年度	(かわまちづくりを H32 までに変更) 第 11 回かわまちづくり懇談会を開催。もりおか中津川サケ物語作成ワークショップを 4 回にわたり開催し、冊子を編集・発行・沿川小学校や市内観光施設に配布。
H29 年度	第 12 回かわまちづくり懇談会、第 8 回かわまちづくり勉強会を開催。 6 月に、北上川に舟っこを運航する盛岡の会により第 1 回北上川フェスタ IN

	MORIOKA を開催。
H30 年度	第 13 回かわまちづくり懇談会を開催。かわまちづくり勉強会は、中津川グループで第 9 回、北上川グループで第 10 回を開催。民間有志により中津川ミズベリング検討会が発足し、第 1 回～第 2 回を開催。5 月に北上川に舟っこを運航する盛岡の会、国土交通省、市で構成される盛岡地区かわまちづくり(舟運)実行委員会設立。(以下、舟運実行委員会)8 月に第 2 回北上川フェスタ IN MORIOKA を開催。
R1 (H31) 年度	第 14 回かわまちづくり懇談会を開催。中津川グループで第 11 回、北上川グループで第 12 回のかわまちづくり勉強会を開催。中津川ミズベリング検討会は 4 月に「水辺で花見」を開催。舟運実行委員会により、舟運社会実験を延べ 5 回開催。9 月に木伏緑地オープンし、河川敷利用のキャンプも実施。
R2 年度	中津川ミズベリング検討会は 5 月にもりおか中津川サケ物語についての更新検討会を開催し、更新版冊子を編集・発行・配布。中津川ミズベリング検討会等により、8 月 7 日に中津川で映画上映会開催。舟運実行委員会により、舟運社会実験を延べ 2 回開催。
R3 年度	令和 2 年度に国土交通省が整備した船着き場 2 箇所を活用し、舟運実行委員会主催の舟運社会実験を 3 回開催。また、運航初日には、北上川沿川の木伏緑地や鉦屋町界隈の各種イベントと連携し実行委員会主催の『開港祭』を開催。
令和 4 年度	6 月に舟運実行委員会主催の第 5 回北上川フェスタ実施。7 月あつ盛フェスタ、9 月の木伏 3 周年イベントでは、河川敷活用(映画、サウナ、キャンプ)が一層進む。かわまちづくりの整備施設と沿川イベントの音風景を掲載した『盛岡かわまちづくり～季節の音巡りマップ～』を作成・1 万部発行。

(3)連携性

北上川、中津川における各種取り組みにおける連携性の枠組みについては、以下の体制図に示す。

○管理運営体制図



- ※ 施設の維持管理は、各施設管理者が行う。
- ※ 活動団体が主体となって運営する。行政側はその支援を行い協働により実施する。

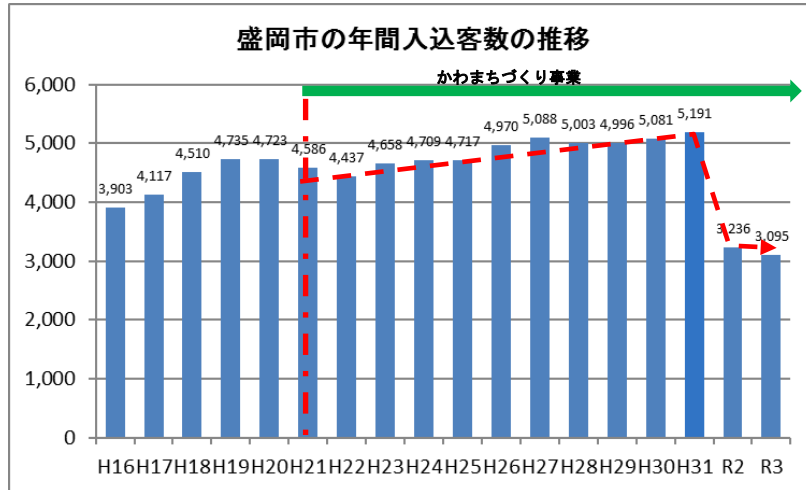
河川空間を活用して活動している各団体が意見交換や情報交換をし、中津川と北上川が連携し、より実践的で持続可能な取り組みとなるように進めている。

(4) 効果

盛岡市の年間入込客数の推移を調べると、かわまちづくり事業を開始した以降、観光客数は着実に増加している。

平成 17 年放映の大河ドラマ「義経」、平成 19 年放映の連続テレビ小説「どんと晴れ」の効果により、平成 20 年度まで入込客数が増加していた。その後、一時的に減少したが、

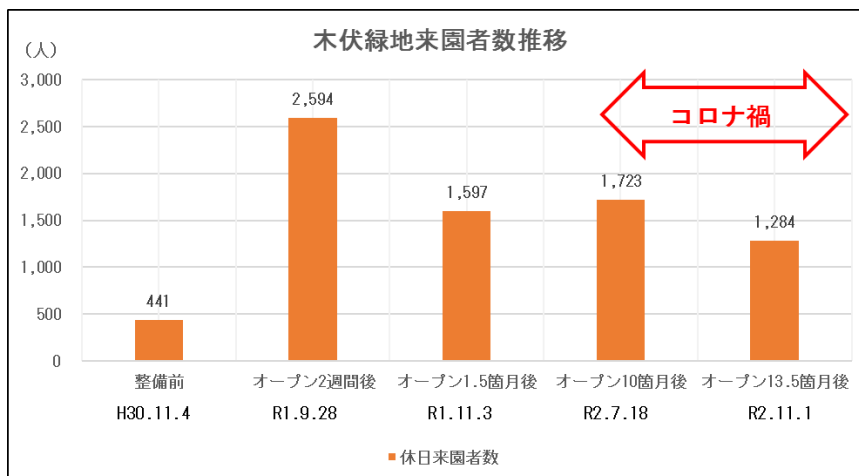
平成 23 年度以降、年間入込客数は増加しており、平成 26 年度に策定した「盛岡市観光推進計画（5 カ年計画）」において、平成 31 年度までに 500 万人の観光客誘致を目標値とした。平成 27 年、28 年、30 年の観光客数が 500 万人を超過し、令和 1 年度は 519 万人に達したが、新型コロナウイルス感染症の影響により令和 2 年度 324 万人、令和 3 年 310 万人に減少した。今後は、コロナ禍の状況を踏まえながら、観光客の入込客数の回復に向けた取組みを進めていく。



一方、北上川沿いの木伏緑地の休日の利用者は、オープン前に比べオープン 1.5 箇月後時点で 3.6 倍、コロナ禍である 10 箇月後、13.5 箇月後でも 2.9～3.9 倍となっており、北上川に面して整備された屋外デッキや芝生広場、国土交通省が整備した高水敷への階段や、船着き場の階段でくつろぐ家族連れやカップルが多く訪れている。木伏緑地のフェンス沿いに照明器具が設置されたことで、防犯効果とともに、夜間でも河川敷が新たなデートスポットになってきている。

このように再整備された木伏緑地は、河川空間がコロナ禍における貴重なオープンスペースであることを再認識させることにつながり、市民の居場所として活用されていると考えられる。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、開放的な緑地や河川空間などの公共用地活用の需要が高まりつつある。負の影響は、まだ続くと思われるが、その中においても本市のシンボル、貴重な観光資源である河川を活用したまちづくりに取り組むこととしている。





芝生広場でくつろぐ利用者



河川敷への階段の利用状況



船着き場階段でくつろぐ利用者



船着き場周辺も照らす木伏緑地の夜間照明

盛岡地区かわまちづくり事業で整備された北上川から中津川までの散策路を利用し、令和2年10月に「2020いわて健康ウォーク」に約870人の市民が参加し、市民の健康増進に大いに役立っている。令和4年10月にも2年ぶりの開催が予定されている。

令和4年3月には、コロナ禍にあっても感染症防止対策を施し、2回に分けて「サケの稚魚の放流会」を開催し、1回目は近隣の杜陵小学生（5年生他）38名、2回目は地元住民365名の計403名が参加している。

また、サケを紹介する冊子「もりおか中津川サケ物語」の内容を更新し1万部を増刷した。沿川の小学5年生と観光施設に配布している。

北上川、中津川ともに、市民の河川空間への関心が高く、北上川の舟運を活用したかわと」まちの連携や子供たちが川遊びに利用するなどの日常的に親水利用がされている。



中津川の水辺で遊ぶ市民

